

# 評価力は支援力



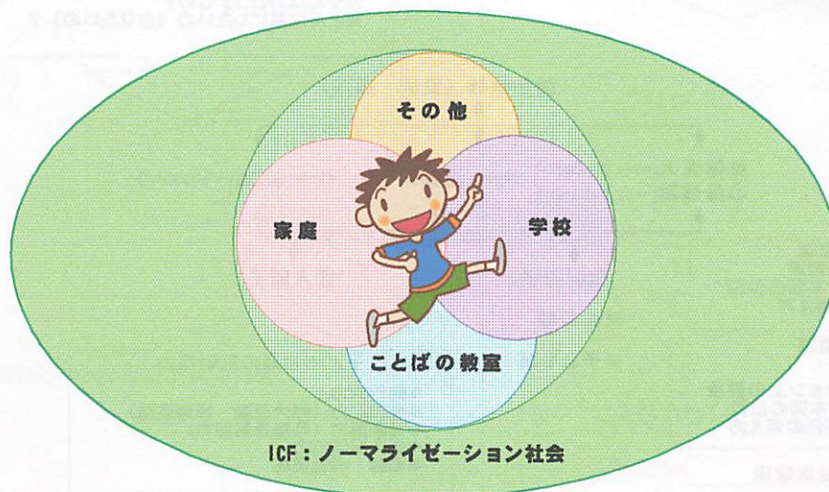
西東京市立保谷小学校ことばの教室 中村勝則

## はじめに：指導と支援

指導＝直接子どもに対して行われるもの → 個別の指導計画

支援＝関係者（機関）が共通理解の上で協働して行うサポート

→ 個別の支援計画



## ICF：パラダイムシフトを指導の中でどのように考えるか

ICIDH (International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps: 国際障害分類試案 1980年) から  
ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health: 国際生活機能分類 2001年) へ

### ICIDHの障害モデル=医学モデル

疾病または変調 → 機能障害 (impairment) → 能力障害 (disability) → 社会的不利 (handicap)

### ICFの構成要素間の相互作用=社会モデル



**医学モデル**：障害を医学的に診断し、その処方を優先する

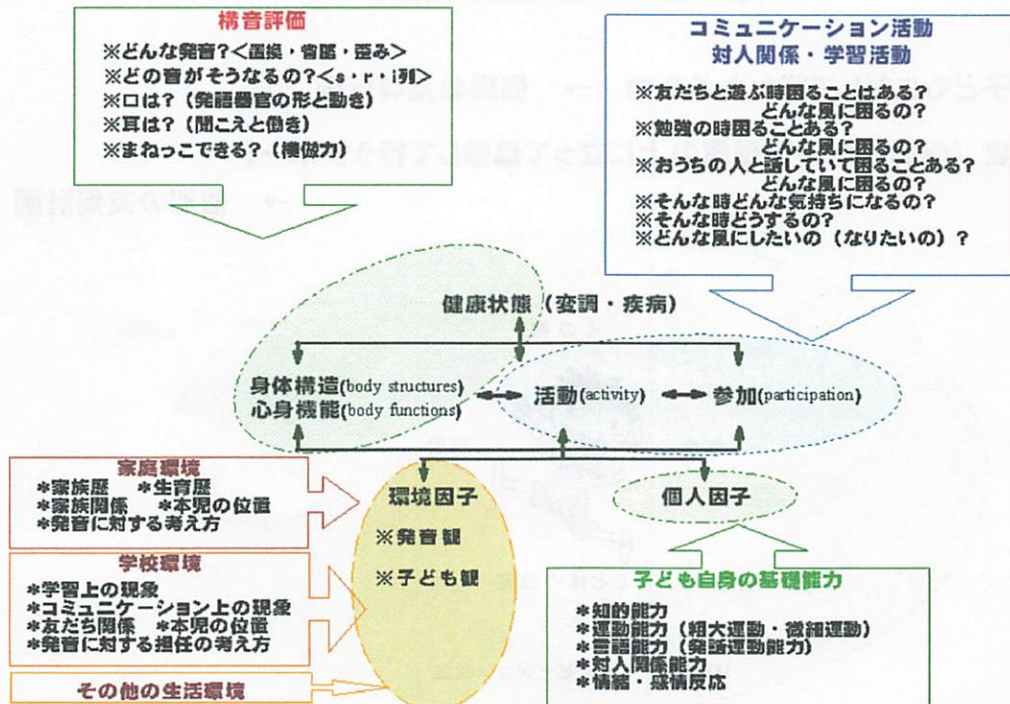
障害という現象を個人の問題として捉え、病氣・外傷やその他の健康状態というかたちでの医療を必要とするものとする。障害への対応は、治療あるいは個人のよりよい適応と行動変容を目的とされる。主な課題は医療であり、政治的なレベルでは、保健ケア政策の修正や改革が主要な対応となる。

**社会モデル**：障害の問題は、社会的な問題であり、政治的な問題

障害を主として社会によって作られた問題とみなし、基本的に障害のある人への完全な統合の問題としてみる。障害は個人の帰属するものではなく、諸状態の集合体であり、その多くが社会環境によって作り出されたものであるとされる。したがって、この問題に取り組むには社会的行動が求められ、障害のある人の社会生活の全分野への完全参加に必要な環境の変容を社会全体の共同責任とする。したがって、問題なのは社会変化を求める態度上または思想上の問題であり、政治的なレベルにおいては人権問題とされる。

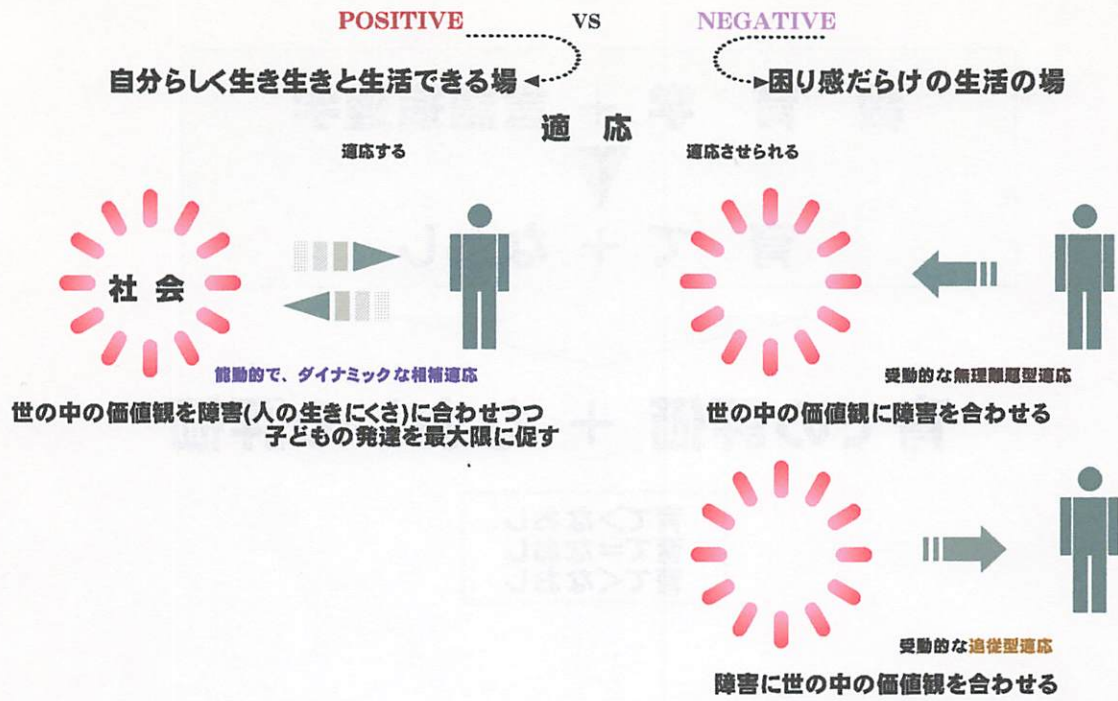
社会モデルの中に医学モデルは必要に応じて活用されると考えることが現実的視点であろう。

### 参考例：ICFの視点で構音を評価してみる





## 活動と参加



- 5 -

## 余談：捨てる力

今、発達的に見て、無理なことを 捨てられるか？

例：不器用な子と図形領域  
白玉団子  
構音



### 子どもをまもる支援

みんなと同じという教育観からの脱却：

できないことがかわいそうではなく、できないことをかわいそうにしないこと

- 6 -

# I. ことばの教室の担当者の立場

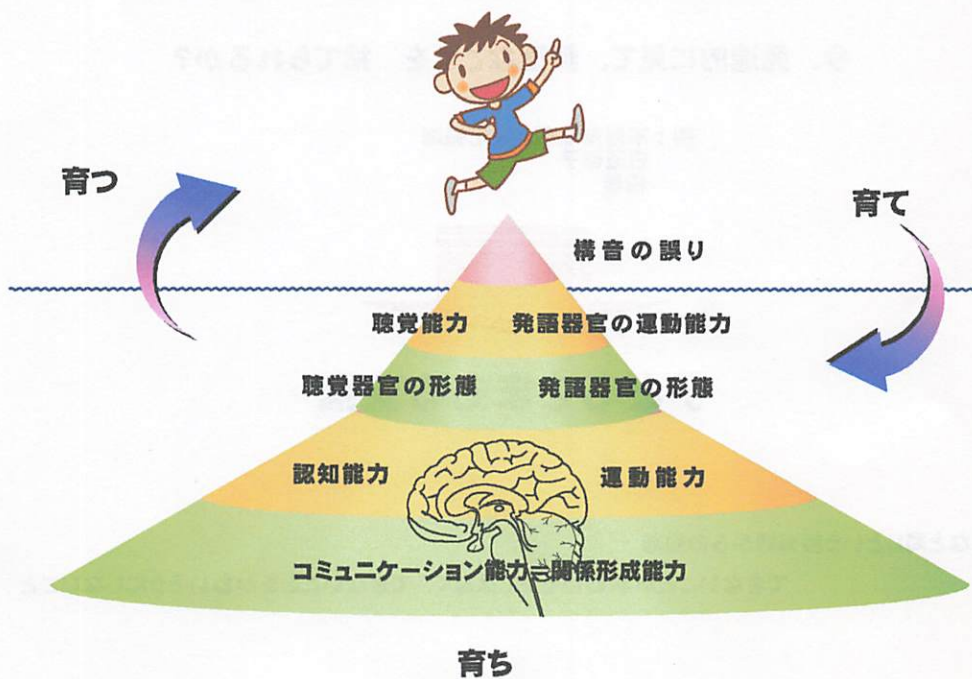
教育学 + 言語病理学

育て + なおし

育ての評価 + なおしの評価

育て > なおし  
育て = なおし  
育て < なおし

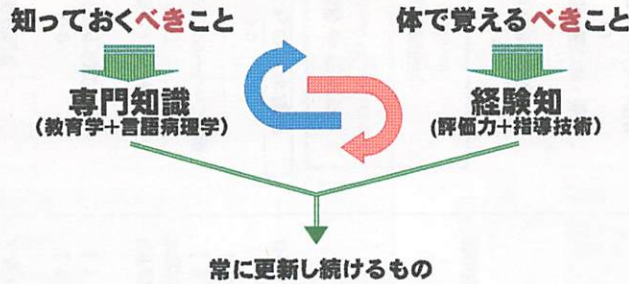
# II. 構音の誤りは表面







### Ⅲ. 評価力を高めるために 1



経験知の質は、経験年数ではない。専門知識を求めながら、常に自分の指導技術を振り返り続けることで、磨きかけられるものである。事例研究会や教室の事例研究での発表や意見交換やビデオの見直しなどで自分の今の力を知り、より高めるための真摯さが将来の指導力につながるだろう。

もし自分の指導が十年一日であるようなら、今必要な知識と技術が磨いてこなかったと悔やまなくてはならないだろう。下手をすると、その場のお茶を濁すための口先だけは達者になっているかも知れないが、自分を誤魔化す自分を常に感じることになるだろう。そして、評価が難しく、指導に工夫を要する子どもに対応できない自分を見出すだろう。こうなると、ますます自己防衛的本能が強くなり、口で言うことと行うことが乖離してくるという悪循環に陥るだろう。

学びは、たゆまなく、こつこつ努力することである。常に新しい知識を求めることである。常に自分の技術を反省することである。ベターな技術はあっても、ベストな技術はない。満足してはいけないという戒めが大切である。

### Ⅳ. 評価力を高めるために 2

より具体的な子ども像をとらえるために磨きをかけたい3つの力

その子のありのままの姿を見守るための寛容で肯定的な受容力による評価

子どもの立場に立っての評価

この子はIQ50しかない VS この子はIQ50もある

子どもの困り感のランクを割り出す評価

子どもが今学びたいものの割り出し



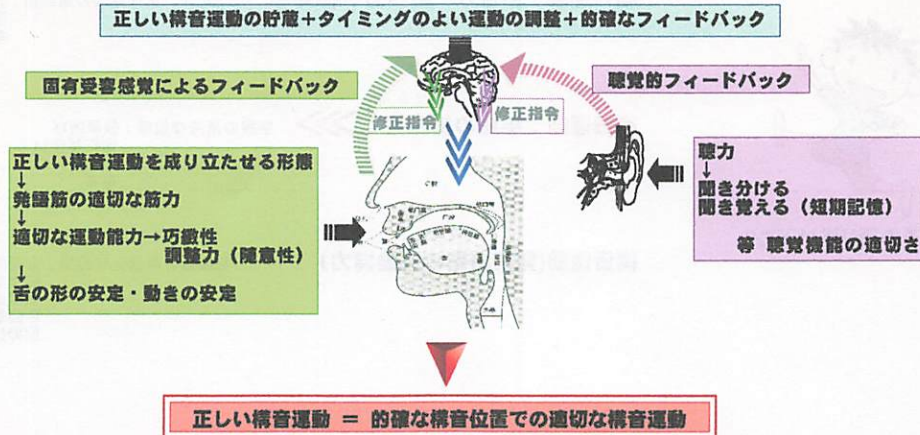
できない力ではなく、できる力を見出すための力=評価力

指導力=できる力をよりできるようにする学びの主体である子どもに対するサポート



# VI. 評価力を高めるために4：構音の誤り方の分析

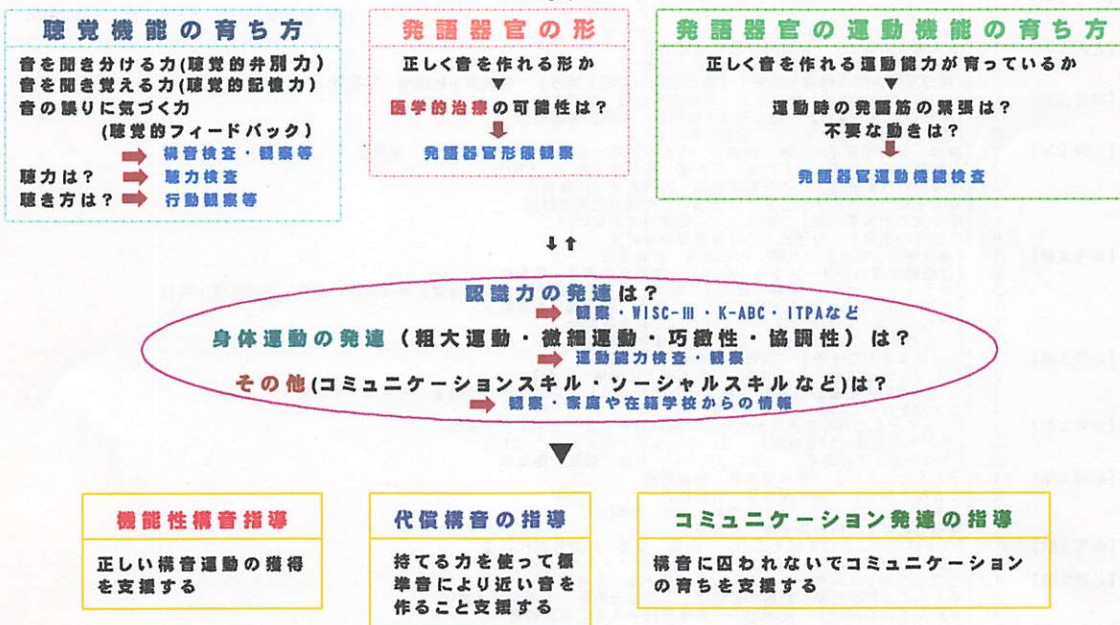
## 1. 評価の視点：構音運動の構造



指導者として：各構音運動を正しく理解し、該当する構音がどのように異なるかを評価力を高める。  
↓  
指導内容を選別し、組み立てる力となる。

## 2. 評価の視点と検査

どの音をどのように → 構音検査



## 補足】評価と指導：運動能力を例に



この子の困り感はどこ？

粗大運動：歩き方・遊び方・体育等



身体活動の活発化：外遊び  
家事の手伝い  
など

微細運動：手指の操作性



手指の活発な使用：伝承遊び  
家事手伝い  
工作  
など

構音運動(発語器官の運動能力)

発語器官の活発な使用：食事の工夫  
様々な口遊び  
お口の体操  
舌癖を取り除く訓練  
舌のトレーニング

### 参考資料：平成18年度教室内初任研修年間計画資料より：月別文献一覧

- |          |   |
|----------|---|
| 4月【必読文献】 | 1. 『言語障害 事例による用語解説 第2版』 松本治雄・後上謙夫編 ナカニシヤ出版                    |
|          | 2. 『言語聴覚療法シリーズ1 言語聴覚障害総論Ⅰ』 倉内紀子編著 建帛社                         |
|          | 3. 『言語聴覚療法シリーズ2 言語聴覚障害総論Ⅱ』 山崎京子編著 建帛社                         |
| 【参考文献】   | ① 『教室で行う特別支援教育』 園分康孝他監修 月森久江他編集 図書分化                          |
|          | ② 『入門講座コミュニケーションの障害とその回復1 子どものコミュニケーション障害』 笹沼澄子監修 大石敬子編 大修館書店 |
|          | ③ 『ヒルベルという子がいた』 P. ヘルトリング作 偕成社                                |
| 5月【必読文献】 | 1. 『構音障害の臨床』 阿部雅子著 金原出版                                       |
|          | 2. 『構音障害の指導技法』 浦井 豊著 学苑社                                      |
|          | 3. 『講座言語障害児の指導と診断1 『構音障害の診断と指導』 飯高京子他編集 学苑社                   |
| 【参考文献】   | ① 『口蓋裂の言語臨床 第2版』 岡崎恵子他著 医学書院                                  |
|          | ② 『構音と音韻の障害』 船山美奈子他監訳 共同医学出版社                                 |
|          | ③ 『波紋』 R. リンザー作 岩波少年文庫  |
| 6月【必読文献】 | 1. 『講座 言語障害児の診断と指導3 吃音の診断と指導』 飯高京子他編 学苑社                      |
|          | 2. 『学齢期の吃音指導』 C. W. デル著 長澤泰子訳 太陽社                             |
|          | 3. 『吃音児の行動療法』 小林重雄監修 遠藤真著 川島書店                                |
|          | 4. 『学童吃音の指導の手引き』 財団法人心身障害児教育財団                                |
|          | 5. 『吃音児の指導事例集』 財団法人心身障害児教育財団                                  |
|          | 6. 『吃音児の指導』 財団法人心身障害児教育財団                                     |
| 【参考文献】   | ① 『論理療法と吃音』 石隈 利紀他著 芳賀書店                                      |
|          | ② 『言語聴覚療法シリーズ13 吃音』 都筑澄夫編著 建帛社                                |
|          | ③ 『コミュニケーション障害の臨床2 吃音』 日本聴能言語士協会講習会実行委員会編集 協同医学出版社            |
|          | ④ 『子どもがどもっていると感じたら』 廣馬 忍他編 大月書店                               |
|          | ⑤ 『どもったもいんだよ』 ことばの臨床教育研究会                                     |
|          | ⑥ 『どもってどんなこと』 ことばの臨床教育研究会                                     |
| 7月【必読文献】 | 1. 『ありのままを生きる』 浜田寿美男著 岩波書店                                    |
|          | 2. 『ことばの発達障害とその指導』 飯高京子他編集 学苑社                                |
|          | 3. 『シリーズ臨床発達心理学4 言語発達とその支援』 岩立志津夫他編著 ミネルヴァ書房                  |
|          | 4. 『ことばをはぐくむ』 中川伸子著 ぶどう社                                      |
| 【参考文献】   | ① 『いま子どもたちの生きるかたち』 浜田寿美男著 ミネルヴァ書房                             |
|          | ② 『子どもが孤独にいる時間』 E. ボールディング著 こぐま社                              |
|          | ③ 『クローディアの秘密』 カニングズバーグ作 岩波少年文庫                                |
| 8月【必読文献】 | 1. 『子どもとことば』 岡本夏木著 岩波新書                                       |
|          | 2. 『ことばと発達』 岡本夏木著 岩波新書  |
|          | 3. 『ことばの前のことば』 やまだようこ著 新曜社                                    |
|          | 4. 『発達心理学』 内田伸子著 岩波書店   |
| 【参考文献】   | ① 『ヒトはなぜことばを使えるか』 山鳥 重著 講談社現代新書                               |
|          | ② 『ぼく、哀れみなんかいらないよ』 R. パースク作 偕成社                               |
| 9月【必読文献】 | 1. 『こころのコミュニケーション』 長澤泰子編 全社協                                  |
|          | 2. 『子どもの「問題行動」理解の心理学』 会田元明著 ミネルヴァ書房                           |
|          | 3. 『生涯発達心理学』 高橋恵子 波多野直余夫著 岩波新書                                |
| 【参考文献】   | ① 『子どもと学校』 河合雄著 岩波新書  |
|          | ② 『からだことばをつなぐもの』 麻生武・浜田寿美男編著 ミネルヴァ書房                          |



- 10月【必読文献】 ③ 『おやすみなさい トムさん』 M. マゴリアン作 借成社  
 1. 『LDの教育』 上野一彦他編著 日本文化科学社  
 2. 『軽度発達障害児の心理アセスメント』 上野一彦他著 日本文化科学社  
 3. 『家族関係を考える』 河合雄雄著 講談社現代新書  
 【参考文献】 ① 『「わかる」ということの意味』 佐伯 睦著 岩波書店  
 ② 『「学ぶ」ということの意味』 佐伯 睦著 岩波書店  
 ③ 『ひみつの通信 きこえますか?』 B. ベリイマン作 借成社
- 11月【必読文献】 1. 『よくわかる言語発達』 若立志津夫編 ミネルヴァ書房  
 2. 『教室の中の学習障害』 上野一彦著 有斐閣新書  
 3. 『意味の形成と発達』 岡本夏木他編 ミネルヴァ書房  
 4. 『個立の風景』 浜田寿美男著 ミネルヴァ書房  
 【参考文献】 ① 『年齢の心理学』 岡本夏木他編 ミネルヴァ書房  
 ② 『発達障害かもしれない』 磯部 潮著 光文社新書  
 ③ 『夜の神話』 たつみや章作 講談社
- 12月【必読文献】 1. 『ひととひとつながり』 麻生武・浜田寿美男編著 ミネルヴァ書房  
 2. 『子どもの心に出会うとき』 村瀬嘉代子著 金剛出版  
 3. 『「私」というものの成り立ち』 浜田寿美男編著 ミネルヴァ書房  
 【参考文献】 ① 『子どもの危機をどう見るか』 尾木直樹著 岩波新書  
 ② 『子どもはことばをからだで覚える』 正高信男著 中公新書  
 ③ 『バッテリー1〜5』 あさのあつこ作 教育画劇
- 1月【必読文献】 1. 『子どもの生活世界のはじまり』 浜田寿美男 山口俊郎著 ミネルヴァ書房  
 2. 『聴覚障害者への統合的アプローチ』 村瀬嘉代子著 日本評論社  
 3. 『子どもとことばの世界』 今井和子著 ミネルヴァ書房  
 【参考文献】 ① 『カウンセリングの実践問題』 河合雄雄著 誠信書房  
 ② 『思い出のマーニー 上・下』 J. ロビンソン作 岩波少年文庫
- 2月【必読文献】 1. 『バイリンガルと言語障害』 日本聴能言語士協会企画 角山富雄他編 学苑社  
 2. 『発達と障害を探る1 コミュニケーションという謎』 荻野悦子他編 ミネルヴァ書房  
 3. 『発達心理学再考のための序説』 浜田寿美男著 ミネルヴァ書房  
 【参考文献】 ① 『0歳児がことばを獲得するとき』 正高信男著 中公新書  
 ② 『さよならをいう時間もない』 J. プルーム作 借成社
- 3月【必読文献】 1. 『言語臨床の「人間交差点」』 手塚邦洋他編 学苑社  
 2. 『ことばと心の発達2 ことばの獲得』 桐谷滋編 ミネルヴァ書房  
 3. 『親と子の心のカルテ』 井原成男著 新興医学出版社  
 【参考文献】 ① 『入門ことばの科学』 田中春美他著 大修館書店  
 ② 『心理療法における言葉と身体』 季 敏子著 ミネルヴァ書房  
 ③ 『モモ』 M. エンデ作 岩波書店

※19年度以降新たな文献が出版され、知識が更新されている